

短歌

森山啓文学賞

選評

本田 守

追憶（わが青春）

今江町 金戸紀美子

原爆禁止世界大会に広島へわが里出でしことなき者ら
男女同権高らかなれど終日ひねもすを僕しもべのごとく母の働く
土間の傍への暗き流しを仕舞ひ来て高流しにとをみな声あぐ
田の彼方に灯る校舎へペダル踏む会話にならぬでこぼこ道を
己がじし暮しを論じ若者らひもじき心満たし来たりつ

一般の部は昨年と同じ九編の応募があった。応募者は昨年とほぼ同じ顔ぶれであるが、昨年よりも表現力や対象把握に深化が見られる作品があった。今回は金戸さんの「追憶（わが青春）」を森山啓文学賞に推薦し、審査員会で賛同を得られた。小松文芸賞は見送り、中田貴美恵さんの「めぐる季節」を奨励賞とした。これまでの文芸賞・奨励賞の受賞者の方々がこの短歌欄をしつかりとささえて下さっていることに敬意と感謝を表したい。前回に続き今回も新人の方の応募があり、新たな風を吹き込んでくれる。今後の活躍を期待したい。

作者の青春時代の感慨が終戦直後の社会情勢とともに詠み込まれている。一首目には当時の青年たちへの冷静な中にも愛惜に満ちた眼差しがある。作者自身も「わが里出でしことなき者」の一人であり、自愛の念も滲む。審査員会で特に評価の高かった二首目からは、変わらない現実への憤りにも似たやるせなさが強く響いてくる。三首目以降は、同世代以外の者にはやや分かりにくい歌かもしれないが、当時の生活の匂いや青年たちの息遣いが感じられる。五首目は下旬に当時の青年たちの姿を象徴的に捉えた表現に心打たれる。個人の追憶ではあるが、混乱と激動の時代を懸命に生きた青年たちの生活と心の記録としても価値のある歌である。主観や感情表現を抑えて描写に徹することで、作者の心情が余韻となつて読む者の心に響く。優れた短歌の典型がここにはある。作者はこれまで二度小松文芸賞を受賞しており、一昨年は森山啓文学賞の候補となつていた。日々の生活や社会との関わりの中で自己を見つめながら、たゆみなく作歌を続けてこられたことが今回の受賞につながったものと思う。